

竹取物語『かぐや姫の生ひ立ち』定期テスト対策問題 解答・解説

■ 解答・解説

問1 訳：今となつては昔のことだが（＝昔のことだが／昔のことであるが）。「今は昔」は、物語や説話の冒頭に置かれる決まり文句で、これから語るのが過去（昔）の出来事であることを示し、語り出しの合図とする働きをします。『今昔物語集』の各話の書き出しとしても有名です。

問2 いう。歴史的仮名遣いの語中・語尾の「ふ・は・ひ・へ・ほ」は、現代仮名遣いでは「う・わ・い・え・お」と読みます。「いふ」は「い・ふ」のうち「ふ」が「う」になり、「いう」と読みます。

問3 イ（人〈人物〉）。「もの」は品物だけでなく、「人・者」を指すことがあります。ここは「竹取の翁という者（人）がいた」という意味なので「人（者）」が正解です。

問4 訳：（竹取の翁という者が）いた。（「あった」も可）／意味：過去。「けり」は過去の助動詞で、「～た・～たそうだ」と訳します。ここは「ありけり」で「（昔、～が）いた」という意味。物語の冒頭でよく使われ、昔から語り伝えられてきた話だという雰囲気を出す働きをします。

問5 ア（〈野山に〉分け入って）。「まじる」は「分け入る・入りこむ」の意味。「野山にまじりて」で「野や山に分け入って」となります。翁が竹を取りに山へ入っていく様子を表しています。

問6 イ（～しながら／～してはくくり返し・継続）。接続助詞「つつ」は、同じ動作のくり返しや動作の継続を表し、「～しては・～しながら」と訳します。「竹を取りつつ」で「竹を取っては（取り続けて）」という意味です。

問7 意味：さまざまな・いろいろな（すべての）。「よろづ」は漢字で「万」と書き、「たくさん・あらゆる・さまざまな」の意味です。「よろづのことに使ひけり」で「いろいろなことに使っていた」。現代仮名遣いでは「よろず」と書きます（「づ」→「ず」）。

問8 もとの語：は。「名をば」の「ば」は、係助詞「は」が、その前の「を（格助詞）」の音につられて濁音化したものです（を＋は→をば）。意味は「名を（は）」と、名前を取り立てて示す働きをしています。

問9 修辞法：係り結び（係り結びの法則）／結びの語の活用形：連体形。係助詞「なむ」があると、文末（結び）はふつうの終止形ではなく連体形で結びます。ここでは過去の助動詞「けり」が連体形「ける」に変化しています（なむ→ける）。「なむ」は強調を表す係助詞です。

問10 活用形：連体形／理由：直前に係助詞「なむ」があるため、係り結びの法則により結びの「ける」が連体形になっているから。「光る竹なむ一筋ありける」も、問9と同じく「なむ→連体形（ける）」の係り結びです。

問11 イ（不思議に思つて）。「あやし」は「不思議だ・変だ」の意味で、「あやしがる」は「不思議に思う」。光る竹を見て翁が「おや、変だぞ」と思った場面です。「みすぼらしい」の意味の「あやし」もありますが、ここは光る竹を見て近寄る流れなので「不思議に思つて」が正解です。

問12 イ（完了・存続）。「たり」は完了・存続の助動詞で、「～た・～ている・～てある」と訳します。「光りたり」は「光っている（光っていた）」、「ゐたり」は「座っていた」という意味になり、ここでは状態が続いている存続の意味でとらえるとよく合います。

問13 イ (約9センチメートル)。「一寸」は約3センチメートルなので、「三寸」はその3倍で約9センチ。手のひらにのるくらいの、とても小さな姿だったことがわかります。

問14 たいそう・とても・非常に。「いと」は程度がはなはだしいことを表す副詞で、「たいへん・とても」と訳します。「いとうつくしうて」で「たいそうかわいらしい様子で」となります。

問15 かわいらしい様子で (かわいらしくて)。古文の「うつくし」は、現代語の「美しい」ではなく「かわいい・かわいらしい」の意味です (小さいものをいとおしむ気持ち)。「うつくしうて」は「うつくしくて」がウ音便になった形。小さな姫のかわいらしさを表しています。

問16 ウ音便。形容詞「うつくし」の連用形「うつくしく」に「て」が付いた「うつくしくて」の「く」が「う」に変化して「うつくしうて」となっています。このように「く」が「う」に変わる音の変化をウ音便といいます。

問17 漢字：居たり／意味：座っていた (すわっていた)。「ゐる」は「座る・(そこに)いる」の意味の動詞で、漢字では「居る」と書きます。「ゐたり」で「座っていた」。歴史的仮名遣いの「ゐ」は現代仮名遣いでは「い」と読みます。

問18 (1) 竹取の翁 (さぬきの造)。本文冒頭の「竹取の翁」が、竹の中に光る竹を見つけました。

(2) 三寸 (約9センチ) ほどの小さな人が、たいそうかわいらしい様子で座っていた。筒の中が光っており、見ると小さな人がいた、という場面です。これがのちのかぐや姫です。

問19 (1) 祖 (おや)。『源氏物語』では『竹取物語』を「物語の出で来はじめの祖」(＝物語というものが生まれた最初の元祖)と評しています。これは『竹取物語』が日本最古の物語 (作り物語) とされる根拠としてよく出題されます。

(2) イ (伝奇物語)。光る竹から姫が生まれる、月へ帰るなど、現実にはありえない不思議な内容をもつ物語を「伝奇物語」といいます。作者・成立年は未詳ですが、平安時代前期に成立したと考えられています。

問20 (1) ウ (作者未詳 <不明>)。『竹取物語』の作者は誰なのか、現在もわかっていません (未詳)。

(2) イ (平安時代 <前期>)。『竹取物語』は平安時代の前期に成立したと考えられている、現存する日本最古の物語 (作り物語) です。かな文字で書かれていることもおさえておきましょう。
